

アトサヌプリ (硫黄山)



阿寒摩周国立公園

川湯ビジターセンター



開館時間

4月～10月 8:00～17:00
11月～3月 9:00～16:00

休館日

毎週水曜日(7月第3週～8月31日は無休、水曜祝日の際は翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)
入館料 無料

088-3465

北海道川上郡弟子屈町川湯温泉2-2-6

TEL 015-483-4100

FAX 015-483-4111

URL <https://www.kawayu-eco-museum.com/>

製作 環境省

摩周・屈斜路・アトサヌプリカルデラの成り立ち

～はじめは海～
約2000万年前から1000万年前、阿寒・知床附近一帯は海でした。海底火山が盛んに活動し、火山からの噴出物や泥、砂などが厚く海底にたまりました。この後、200～300万年前からゆっくりと隆起し、一部が海面に現れました。



今からおよそ40万年前、この地域にはいくつかの火山が連なっていたと考えられています。そして約3万年前にかけて、この地域で大噴火が繰り返されました。その噴火に伴う火砕流は、道東全域を埋め尽くすほどの巨大なものでした。



マグマを噴出した場所の地下に空洞ができたため、地面が落ち込み、巨大な屈斜路カルデラが誕生しました。このくぼ地に水が溜まり、屈斜路湖の原型ができました。



屈斜路カルデラ形成後も活発な火山活動が続き、摩周火山や古アトサヌプリ火山など、新たな火山がいくつも生まれました。



およそ7千年前には屈斜路カルデラの東側で摩周火山が噴火し、新たに摩周カルデラを形成。長い年月を経て水がたまり、摩周湖となりました。



古アトサヌプリの周囲にサワンチサップ(現在のかぶと山)と新期アトサヌプリ(現在の硫黄山)を形成し、今の姿がほぼ完成しました。



この地域の最後の大きな噴火は約1千年前の摩周岳の噴火でした。今でも爆裂火口が残っています。



数百年前にはアトサヌプリ(硫黄山)の山頂付近で水蒸気爆発が起き、「熊落とし」と呼ばれる火口跡が残っています。

アトサヌプリ溶岩円頂丘群

アトサヌプリ火山群は屈斜路カルデラの中央部に、円形であった屈斜路湖の東半部を埋めた形で、ドーム状をした計10個の溶岩円頂丘からなります。これらの円頂丘群は約7千年前の摩周火山の火砕流堆積物を鍵層として、新旧2期に大別されます。古いI期の6山は新しいII期の4山を取り巻くように位置しています。また、ほとんどの山にアイヌ語にちなんだ名前がついています。

①丸山

標高225m I期 単一構造
釧路川源流部付近にある丸いドーム型の円頂丘。

②ヌプリオンド

標高231.5m I期 単一構造
地名：ヌプリ(山) オホンド(尻)

③ニフシオヤコツ

標高195.8m I期 単一構造
地名：ニ(木) プシ(はねる) オヤコチ(くびれたところ)

④トサモシベ

標高370.3m I期 単一構造
地名：トウ(湖) サム(傍) ウシユ(～にある) ペ(もの)
(湖の傍にたっているもの(池の湯の裏山))



⑤オプタデシュケ

標高504.1m I期 二重構造
地名：オプ(槍) タ(そこで) デシケ(それる) <コタンの裏山で、昔藻琴山と槍投げをして争ったとき槍がそれたという伝説あり>

⑥リシリ

標高397m II期 単一構造
扁平な円頂丘で、溶岩は北方で湯沼をせき止め、南方へ2.5kmも流れ、美留和原野に達する。

⑦サワンチサップ

標高520m II期 二重構造
地名：サ(前方) ワ(に) アン(ある) チサップ(?)
別名：帽子山 山の中腹にスキー場の跡あり。

⑧マクワンチサップ

標高574.3m II期 二重構造
地名：マク(後方) ワ(ある) チサップ(?)
別名：かぶと山

⑨アトサヌプリ

標高512m II期 二重構造
地名：アトサ(裸) ヌプリ(山) <硫黄山>
円頂丘群の中で一番新しく、噴気孔は1500以上あり、現在も絶えず活動をしている。

⑩274m山